（独立行政法人教員研修センター委嘱事業）

教員の資質向上のための研修プログラム開発事業

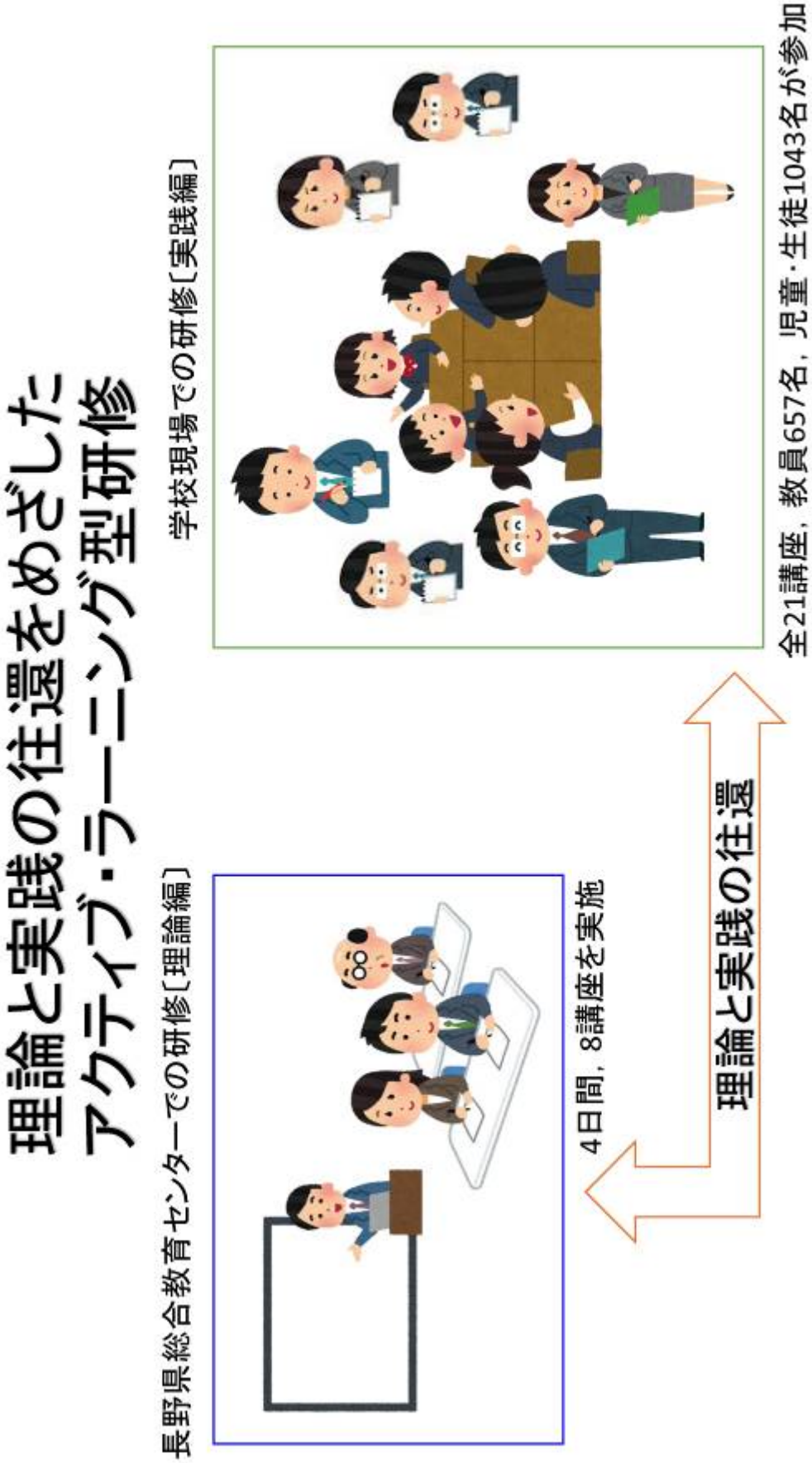
# 実 施 報 告 書

| | |
|---|---|
| プログラム名 | 理論と実践の往還を実感するアクティブ・ラーニング型研修体制の構築 |
| プログラムの特徴 | 本プログラムは，これまでに長野県教育委員会（長野県総合教育センターを含む。以下同じ。）と上越教育大学大学院教育実践高度化専攻（以下「教職大学院」という。）がそれぞれに行ってきた研修を連携して実施するものである。長野県教育委員会が把握する学校現場の実態から導いた喫緊の教育的課題に基づき，長野県教育委員会と教職大学院教員が連携して研修を企画・運営する。教職大学院教員の持つ理論，教職大学院院生（現職院生と学部卒院生による。以下同じ。）チームによる最新の実践成果を統合的に研修する理論編の研修と，学校現場の中で理論編の知見に基づき，教職大学院院生チームが授業などを行う実践編の研修を組み合わせることにより，初任者レベルの教員から中堅教員，ベテラン教員まで幅広い教員にとって，学校現場にすぐに効果的な力を身に付けることのできる研修を実現する。<br>また，研修の成果と課題を長野県教育委員会と教職大学院と共有し，それにより，長野県教育委員会の研修体制を強化するほか，教職大学院は，最新の教育適所問題における学校現場の実態に合わせたカリキュラム改善に役立てる。 |

平成２９年３月

機関名　国立大学法人上越教育大学　　連携先　長野県教育委員会

## プログラムの全体概要


理論と実践の往還をめざした
アクティブ・ラーニング型研修
長野県総合教育センターでの研修〔理論編〕
学校現場での研修〔実践編〕
4日間，8講座を実施
理論と実践の往還
全21講座，教員657名，児童・生徒1043名が参加

## Ⅰ　開発の目的・方法・組織

### 1　開発目的

高度専門職業人としての教員養成システムを構築して運営されている教職大学院は，開設当初から理論と実践の往還を実践することで学び続ける教師を育成している。さらに学部新卒学生の教員への就職率はほぼ 100%であり，若手教員養成のモデルともなっている。しかしながら，教職大学院の定員は，平成 27 年度現在，全国で 800 人程度の養成にすぎず，現職教員全体の資質向上をめざすには定員が少なく，難しいのが現状である。

本大学では，平成 25 年概算事業「教師の専門職化をフォローする研修体制の構築」を平成 25 年度より 3 年間実施してきた。長野県教育委員会，新潟県教育委員会，富山県教育委員会と本大学との連携事業であり，教職員の資質向上を諮るために，自主的・自発的な研修希望に応え，研修の機会及び情報の提供，助言を行い，研修活動を支援してきた。その結果，研修が一方的な教職員への知識伝達に終わらず，研修の後，学校現場に戻ってから研修内容を具体化し，どのように反映したのか，問題は何であったのか等を講師にフィードバックするシステムを考案し実践した。特に長野講座では，平成 26 年度 100 名の受講者から平成 27 年度 230 名の受講者と増加し，教職大学院の理論を学ぶ教職員の需要が少なからず存在することを実証した。しかし，研修内容は理論的な内容が主で，受講者が能動的なアクティブ・ラーニング型の研修を行っているが，実際の授業や学校現場の内情に対応する実践を伴った研修となっているわけではない。

理論と実践の往還による学修の成果は教職大学院で高い評価を得られていることから，この学修を一般の教職員が行う研修を実現できるシステムの構築が必要である。長野県教育委員会と今以上に連携を深め，理論と実践の往還を目指した研修プログラムを開発することを目的とする。

### 2　開発の方法

#### (1)　プログラム開発の背景

従来の研修において，受講者である教員は，自らの課題を鑑み，その内容を選択し，研修を受講する。講師は，講義形式で，最新の理論にもとづき研修を行うが，研修内容は，一般化された学校を想定しているため，受講者，それぞれの学校に適合しているわけではない。特に長野県では，山間地小規模校や都市部の学校等その差が激しく，各校の実態が必ずしも一般化された学校と同一とはいいがたい。研修を受けた教師は，自らの学校の実態に合わせて，研修内容を咀嚼する必要があるが，受講者の資質・能力によっては，学校の実態に合わせられるとは限らない。

#### (2)　プログラムの概要

本プログラムは，「理論編研修」と「実践編研修」の２つの研修からなる。長野県総合教育センターで行う研修を「理論編研修」とし，ここでは，受講者同士で，受講者の学校に研修内容を持ち帰った場合，どのようなことができるのかを話し合う時間を設ける。また，理論編研修を受講した受講者の学校をお借りし，講師が出向き学校現場の中で研修を行う「実践編研修」を行う。

「理論編研修」は，長野県教育委員会が，長野県内の教育事情を鑑み，喫緊する教育的課題を選出する。この教育的課題を解決に導き出せる理論を持ち合わせたアドバイザーを上越教育大学教職大学院が選定し，理論編研修となる講座を長野県教育センターで開催する。また，教職大学

院院生が行う実習科目「学校支援プロジェクト」での実践を，アドバイザーの理論と合わせて示すことを目的とする。このことから，上越教育大学の教員の理論を伝える講演と院生による実践例を示すことで，理論と実践の往還をバランス良く研修することができると考える。

「実践編研修」は，受講者の学校現場に，上越教育大学の教員が出向き，理論に基づく研修を学校現場にて行うことを目的としている。「学校支援プロジェクト」で実践を行っている教職大学院生がチームとなり実践し，理論編研修で受講した受講生や開催校の職員はもとより，近隣の諸学校の希望者にも開放する。この長野モデルを全国の同様な教育的課題を持ち合わせた学校現場に適応し研修を行うものである。

３ 開発組織

| No | 所属・職名 | 氏　名 | 担当・役割 |
|---|---|---|---|
| 1 | 長野県総合教育センター・<br>所長 | 三浦　章 | 教職大学院との連携の担当<br>（協議会副議長） |
| 2 | 長野県総合教育センター・<br>指導主事 | 齋藤　俊樹 | 教職大学院との連携の担当 |
| 3 | 上越教育大学大学院学校教育研究科・<br>教授 | 松沢　要一 | 開発プログラムの総括担当<br>（協議会議長） |
| 4 | 上越教育大学大学院学校教育研究科・<br>教授 | 桐生　徹 | 開発プログラムの事務担当<br>長野県教育委員会との連携担当 |
| 5 | 上越教育大学大学院学校教育研究科・<br>教授 | 水落　芳明 | 研修講座の企画，運営担当 |
| 6 | 上越教育大学大学院学校教育研究科・<br>准教授 | 阿部　隆幸 | 研修講座の企画，運営担当 |
| 7 | 上越教育大学大学院学校教育研究科・<br>准教授 | 片桐　史裕 | 研修講座の企画，運営担当 |

Ⅱ　開発の実際とその成果

1　理論編講座

(1)　研修の背景やねらい

理論編研修は，長野県総合教育センターにおいて実施する研修を指す。主に大学教員が学校関係の教職員へ理論的な背景を含めた研修を実施する。研修項目は，長野県教育委員会が情報収集した喫緊な課題を元にしている。その結果，4 項目 8 講座を実施することになった。それぞれの研修の目的などは(4)各研修について，を参照されたい。

(2)　対象、人数、期間、会場、日程、講師

| 研修項目 | 対象 | 参加人数 | 期間 | 会場 | 日程 | 講師 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 学級づくりのための講座 | 小・中・高・特等の教員 | ３０ | 6 月 10 日 | 長野県総合教育センター | 10:00～12:00 | 片桐史裕 准教授 |
| | | ３０ | 6 月 10 日 | | 13:00～15:30 | 赤坂真二 教授 |
| 学校づくりのための講座 | | １４ | 7 月 1 日 | | 10:00～12:00 | 桐生　徹 教授 |
| | | １４ | 7 月 1 日 | | 13:00～15:30 | 水落芳明 教授 |
| 新しい学習方略に向けた講座 | | ２５ | 9 月 6 日 | | 10:00～12:00 | 廣瀬裕一 教授 |
| | | ２５ | 9 月 6 日 | | 13:00～15:30 | 西川　純 教授 |
| 協同を育むための講座 | | ３１ | 9 月 16 日 | | 10:00～12:00 | 佐藤多佳子 准教授 |
| | | ３１ | 9 月 16 日 | | 13:00～15:30 | 阿部隆幸 准教授 |

(3)　各研修について

| 研修項目 | 時間数 | 目　　的 | 内容、形態、使用教材、進め方等 |
|---|---|---|---|
| 学級づくりのための講座 | 2 | 群読という学習活動を体験し，協働で１つの群読作品を作り上げる過程で，人間関係づくりができていくことを体験し，学級づくりに取り入れる方略を習得することを目指す。 | ・内容：「群読で学級づくり」をテーマにして，群読に取り組むことで，協働活動を生み出し，人間関係を構築していく実践を紹介し，群読を体験した。<br>・実施形態：講義と演習<br>・使用教材：自作の群読脚本集<br>・進め方の留意事項：演習では６名程度のグループで群読の脚本づくり，練習，発表をおこない，協働学習の過程で人間関係がどのように変化したかを意識させた。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 2.5 | 学級集団づくりにおける実践的課題から自分自身のクラスを振り返り，それを改善するための理論と方法をマネジメントの視点で捉えた教師のリーダーシップのあり方を理解する。 | ・内容： 学級集団づくりを学ぶ必要性を伝え，学級集団づくりで見られている実践的な課題を５点指摘した。また，それを克服するためにマネジメントの視点から教師のリーダーシップを考察し，具体的技術とともに伝えると共に，自分自身の学級で適用できることを考えた。<br>・実施形態：講義と演習<br>・使用教材：特になし<br>・進め方の留意事項：ペアになって講義内容について考えを述べ合ったり，簡単な演習をしたりした。 |
| 学校づくりのための講座 | 2 | 異学年合同授業を取り入れることで，学習者に知識・理解の定着のみならず，社会的，倫理的，汎用能力の育成をめざす。そのための方略を理解することをねらいとする。 | ・内容：「小小，小中，中高連携の可能性」をテーマにして，小中一貫教育における異学年交流の実態，アクティブ・ラーニングと異学年合同授業の関連を説明した。その上で，具体的な事例を紹介し，協議し合った。<br>・実施形態：講義とグループ協議<br>・使用教材：特になし<br>・進め方の留意事項：受講者同士で関わる状況を作り，講座が異学年の学びの場である事を理解させた。 |
| | 2.5 | 教員１人１人が目標を共有し、責任を分担して協働することの価値について、理論と実践の両面から検討することをねらいとする。 | ・内容：Ｗｅ（目標を共有して協働し成果も共有する関係）を構築することの理論や演習、授業実践や校内研修における実践を紹介した。<br>・実施形態：講義と演習<br>・使用教材：特になし<br>・進め方の留意事項：学校生活の具体的な場面を取り上げて、解説する理論について、具体例を基に理解できるよう留意した。また、アクティブ・ラーニングが注目される背景と授業づくりや学校づくりの理論について、関連して考えられるように留意した。 |
| 新しい学習方略に向けた講座 | 2 | 18歳選挙権をめぐる政治教育等に関する国の動きや議論を検証しながら、法的観点と教育的観点を踏まえた主権者教育の在り方を、教師の姿勢を中心に考える。 | ・内容： 「主権者教育と政治教育」をテーマにして、両者の異同を明らかにしながら、小中高等学校を一貫した主権主体(public citizen)育成の教育の在り方を、アクティブ･ラーニングの視点から考える。<br>・実施形態：演習→グループ協議→全体協議→講義<br>・使用教材：教育法規(抄)､新聞記事、教育雑誌記事<br>・進め方の留意事項：演習による個別の学びからグループによる協働の学び等を経て、講義で新たな知見を提示して思考を発展させる。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | 2.5 | 大学入試改革が2020年度から実施されることで，高校での授業改善も進行され，その中核となるのがアクティブ・ラーニング（AL）である。ALの実践と子どものこれから生きる社会との関連性などを理解する。 | 内容：「アクティブ・ラーニングとは何か？」をテーマにして，今後の日本社会がきわめて厳しいこと，それに対応するためエリート教育を改革していることを入試問題で説明した。その上で，具体的な合同『学び合い』の事例を紹介し，協議し合った。<br>・実施形態：講義とグループ協議<br>・使用教材：特になし<br>・進め方の留意事項：受講者同士で関わる状況を作り，講座が異学年の学びの場である事を理解させた。<br>・その他:特になし |
| 協同を育むための講座 | 2 | 教室という協同の場で仲間とかかわり合いながら文学を読むことの意義を理解し，汎用的な読みの力をつけるための読みの交流の学習課題の在り方について考える。 | ・内容：「読みの交流」によって，個々の読みがつくられる過程で読みの方略が共有されることを体験し，学習課題の要件を考える。教師の協同的な教材分析・学習課題づくりの手法で文学教材の学習デザインを行う。<br>・実施形態：講義・グループ協議<br>・使用教材：特になし<br>・進め方の留意事項：学習者だけでなく，教師も協同的に指導案づくりを進めることの価値を実感させる。<br>・その他:特になし |
| | 2.5 | 学力向上を含めた、学習への取り組みは「個別化」と「協同化」の視点が大切になると考え、どちらかではなくどちらも日常の授業の中でスムーズに取り入れる方法を話し合いで見つける。 | ・内容：「個別と協同の往来に着目した学習デザイン」をテーマにし、自分自身を見つめ、考え、取り組んで行こうとする「個別」の学びと、自分とは異なった考えを持つ友人と共に考え、取り組み、解決していく「協同」の学びを自由に往来できる学習デザインを考えた。<br>・実施形態：講義とグループ協議<br>・使用教材：特になし<br>・進め方の留意事項：相互意見交流できる状態を作った。<br>・その他:特になし |

２ 実践編研修

(1) 実施概要

実践編研修は，長野県の学校のみならず，のべ 21 校で実施し，参加者数は，教員 657 名，参加した児童生徒数 1043 名となった。下記表表 2-(1)-1 が，実践編研修を実施した一覧であり，表 2-(1)-2 は，その実施した都道府県と学校数を表している。

表 2-(1)-1 実践編研修実施校一覧

| | | | | 講師 | | 参加者数 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| NO. | 県名 | 学校名 | 実施日 | 教員 | 院生 | 教員 | 児童･生徒 |
| 1 | 新潟県 | 上越市立春日中学校 | 6 月 6 日 | 桐生 | 2 | 38 | 0 |
| 2 | 新潟県 | 阿賀野市立水原中学校 | 6 月 8 日 | 西川 | 2 | 11 | 32 |
| 3 | 長野県 | 宮田村立宮田中学校 | 6 月 8 日 | 西川 | 2 | 22 | 113 |
| 4 | 高知県 | 四万十町立昭和小学校 | 6 月 10,11 日 | 水落 | 1 | 60 | 8 |
| 5 | 新潟県 | 村上市立村上第一中学校 | 6 月 22 日 | 西川 | 2 | 17 | 35 |
| 6 | 新潟県 | 新潟市立中之口中学校 | 7 月 4 日 | 西川 | 2 | 25 | 164 |
| 7 | 長野県 | 安曇野市立豊科北小学校 | 7 月 6 日 | 西川 | 2 | 25 | 83 |
| 8 | 長野県 | 宮田村立宮田小学校 | 7 月 7 日 | 西川 | 2 | 20 | 88 |
| 9 | 神奈川県 | 横浜市立永田台小学校 | 7 月 15 日 | 阿部 | 0 | 24 | 46 |
| 10 | 新潟県 | 新潟市立阿賀小学校 | 7 月 28 日 | 阿部 | 0 | 12 | 0 |
| 11 | 神奈川県 | 神奈川学園中学校･高等学校 | 7 月 30 日 | 片桐 | 0 | 27 | 0 |
| 12 | 新潟県 | 佐渡市立佐和田中学校 | 9 月 7 日 | 原 | 4 | 7 | 81 |
| 13 | 新潟県 | 佐渡市立佐和田中学校 | 10 月 7 日 | 原 | 3 | 4 | 0 |
| 14 | 長野県 | 飯田市立旭ヶ丘中学校 | 10 月 12,13 日 | 赤坂 | 0 | 30 | 35 |
| 15 | 栃木県 | 栃木県立さくら清修高校 | 10 月 12 日 | 西川 | 1 | 12 | 21 |
| 16 | 愛知県 | 西尾市立平坂中学校 | 10 月 13 日 | 水落 | 2 | 200 | 64 |
| 17 | 新潟県 | 学校法人中越学園 中越高等学校 | 10 月 19 日 | 原 | 4 | 13 | 38 |
| 18 | 新潟県 | 学校法人中越学園 中越高等学校 | 10 月 31 日 | 原 | 3 | 13 | 38 |
| 19 | 新潟県 | 学校法人中越学園 中越高等学校 | 11 月 22 日 | 原 | 4 | 13 | 38 |
| 20 | 静岡県 | 静岡市立大里西小学校 | 11 月 14 日 | 水落 | 3 | 31 | 91 |
| 21 | 青森県 | 八戸市立長者中学校 | 12 月 1 日 | 西川 | 2 | 12 | 100 |
| | | | | 合計 | 41 | 616 | 1075 |

表 2-(1)-2 参加した学校所在地

| | 述べ参加学校数 | 対象の都道府県 |
|---|---|---|
| 1 | １０校 | 新潟県 |
| 2 | ４校 | 長野県 |
| ３ | ２校 | 神奈川県 |
| ４ | １校 | 高知県，愛知県，青森県，静岡県，栃木県 |
| 計 | ２１校 | |

## 2－(2)－1　アクティブ・ラーニングに最適な授業研究会【上越市立春日中学校】

(1)　研修の背景やねらい

異学年合同授業においては，アクティブ・ラーニングの実践を行いやすい，それは，アクティブ・ラーニングは，従来の授業でめざした教養，知識だけではなく「認知的，倫理的，社会的能力」の育成もめざすねらいとなっているためである。そこで，異学年合同授業にもアクティブ・ラーニングの授業にも生かすことができる，学び合うこどもの授業内の様子を参観し，子どもの学びのストーリーを把握するための方略について，演習と体験を通して理解することをねらいとした。

(2)　対象、人数、期間、会場、日程、講師

①　対象，人数，期間，会場：中学校の教職員，38 名，6 月 6 日，上越市立春日中学校

②　日程：15:40～16:00　アクティブ・ラーニングと授業研究について説明

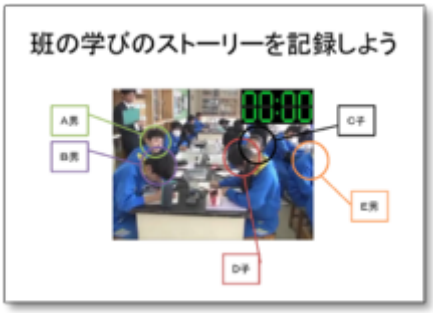
16:00～16:30　演習:子どもの学びのストーリーを読み解く授業方略の演習

③　講師：桐生　徹，田村領太（M2），佐々木郁（M2）

(3)　研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

理論編講座を受講している教師は研究主任だけであったことから，まず，体験する演習の理論的な部分を簡略化して伝えた。その後，実際の授業の様子を 15 分間視聴した後，2 色付箋紙と時系列拡大模造紙を用いて，授業検討会を実施した。

(4)　研修について




演習では，実際の授業風景を右図のように固定したカメラで 15 分間映像を流した。その間，受講者は，気になったり，感心したりした部分を右のカウントしているタイマの数字と共に記録していった。15 分経過後，2 色付箋紙にメモをした内容の中で，他の方と情報を共有した方がよいと思われるメモ内容を選択し，付箋紙に単文で記入した。赤の付箋紙には，教師や教材，教室環境等の気づきを記入し，黄色の付箋紙には，子どもの学びでの気づきを記入した。

4，5 人班で時間を記入した拡大模造紙を取り囲み，自ら記入した付箋紙を時間軸に沿って貼りながら説明を話した。似ている内容や部分に関しては，付箋紙を続けて貼り，その部分について話し合いを行った。

(5)　受講者の感想など

・これまでは、授業案や教師、教材で授業を見がちだったが、生徒の姿で授業を語るという新しい視点をいただいた。

・付箋紙により、授業の様子が視覚化でき、どこが山場なのかがよくわかった。

・何もやっていないように見える生徒でも、観察することにより、見えてくるものがあった。

(6)　今後の展開

本実践編講座をきっかけにして，会場校では，各教科でこの授業検討会を実践している。授業における教師の授業観察力を高めていくことが可能となっていくと考える。

### 2-(2)-2　中学数学『学び合い』の授業実践と課題づくりワークショップ【阿賀野市立水原中学校】

(1)　研修の背景やねらい

阿賀野市立水原中学校数学科では，子ども達が主体的に学んだり関わり合って学んだりする授業づくりを課題としている。そこで『学び合い』の授業の実践を２時間行い，子ども達の変容を教職員が参観し協議をすることを通して，学修者が能動的に学修し，汎用的能力の育成を図るアクティブ・ラーニングの授業の在り方について考えを深めることをねらいとした。

(2)　対象、人数、期間、会場、日程、講師

①　対象，人数，期間，会場：中学校３年生 32 名及び水原中学校教職員 11 名，6 月 8 日，阿賀野市立水原中学校

②　日程：11：45～12：35　　数学「式と計算」の飛び込み授業
　　13：40～14：30　　数学「平方根」の飛び込み授業
　　15：20～16：50　　協議会及び課題づくりワークショップ

③　講師：福田　健（Ｍ２），橋本和幸（Ｍ２）

(3)　研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

授業を参観し，『学び合い』の理論を学び質疑応答することで，授業場面から想起しやすいと考えた。また，参観職員が担当する教科で目標と評価の一体化を意識した課題を作成するワークショップを配置することで，参観職員の今後の実践につながると考えた。

(4)　研修について

実践授業では，１時間目は子ども達がゴールをイメージしやすい，教職員も取り入れやすいと考え，復習問題のプリントを教科担任に用意してもらった。２時間目は実際の授業進度に合わせて「平方根」の単元での授業を実践した。

授業後の協議会では，『学び合い』の理論の紹介や質疑応答を実施。実践者の長期に渡る実践の成果も含めて紹介した。その後課題づくりワークショップを実施。参観された職員の担当教科の教科書を持ち寄り，各々が今後予定している授業の課題を作成した。その際右図の課題で『学び合い』による課題づくりを体験してもらった。

ここにいる全員が，次のことができる。
①ゴールと評価を意識した課題を１時間分作成する。
②作った課題を３人に見てもらいアドバイスをもらう。
③アドバイスをもとに，改良する。

(5)　受講者の感想など

・生徒の自発的な行動を待つ必要があること，ゴールと評価を考えて授業をつくりそれを生徒と共有する必要があることを学んだ。
・ゴールを明確にして授業を考えることで，課題や生徒にさせたい活動が見えてくる。
・学習意欲の喚起や学習だけでなく，生徒同士のつながりにも影響を与えられると思った。

(6)　今後の展開

本講座を参考にしながら授業実践する職員が増加しており，8 月には『学び合い』の校内研修を実施したと連絡を受けている。今後も実践し続ける職員がいることが期待できる。

### 2-(2)-3 中学校における異学年合同授業【宮田村立宮田中学校】

(1) 研修の背景やねらい

アクティブ・ラーニングは,従来の授業でめざした教養,知識だけではなく「認知的,倫理的,社会的能力」の育成もめざすねらいとなっている。このことから、異学年合同授業はアクティブ・ラーニングの実践をしやすいと言える。今回は,アクティブ・ラーニングの一つである『学び合い』の出前授業を異学年合同で行い,生徒が授業を体験し,教員が授業を参観して今後求められる「認知的,倫理的,社会的能力」の重要性を理解することをねらいとした。

(2) 対象,人数,期間,会場,日程,講師

① 対象,人数,期間,会場： 中学１・2・3年生（113人）,教職員（22人）,6月8日（水）,宮田村立宮田中学校

② 日程：2限目 9：55～10：45 異学年合同授業1時間目 1年数学 2年英語 3年社会
3限目 10：55～11：45 異学年合同授業2時間目 1年国語 2年理科 3年英語
4限目 協議会

③ 講師：西川純 佐々木譲 藤田純祈

(3) 研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

アクティブ・ラーニングの一つである『学び合い』の授業を実践するために、まず２時間、『学び合い』授業の経験のない子どもたちに出前授業を実施し、主体的・協働的に学習するようになる変化を参観した。授業の開始時に，この授業をなぜやるのか,どのようにしてやるのかといった説明を生徒に合わせて行った。部活動や学校の職員室を例として,異年齢での交流の重要性を実感してもらった。その後、協議会では、質疑応答や，理論的なことを伝えた。

(4) 研修について

授業の進め方としては,教師が教えることを主とするのではなく,周りの友人達と協働して課題解決を図ること,1 年生から 3 年生まで全員が授業課題を解決することを伝えた。また,授業後には参観した教職員向けに異学年合同授業、アクティブ・ラーニングに関する質疑応答を行った。

(5) 受講者の感想など

・（生徒）普段,下級生と勉強することはないので新鮮だった。部活の後輩に頼られたのが,嬉しかった。

・（教師）異学年合同授業を初めて見たが，とても良かった。これからの社会は、学力ももちろん大事だが人間関係形成能力が非常に大事になると感じている。そんな中で，一つのスタイルとして，異学年合同授業のアクティブ・ラーニングを積極的に取り組んでいきたいと強く思った。

(6) 今後の教師力の育成に向けた可能性

今回の研修をきっかけに,会場校では,少しずつ異学年合同授業や単学級でのアクティブ・ラーニングにも積極的に励んでいきたいと校長先生よりお言葉としていただいた。

### 2-(2)-4 「目標と学習と評価の一体化」を目指した学び合い授業の理論と実践【四万十町立昭和小学校】

(1)　研修の背景やねらい

近年，汎用的能力の育成を目指してアクティブ・ラーニングが注目されている。アクティブ・ラーニングに関連して，水落教授は，教師による一方的な教示を控え，学習者の自由なコミュニケーションを軸とした「目標と学習と評価の一体化」を目指した授業デザインを提案している。研修会では，その考え方に基づき，異学年合同授業の参観，出前授業，講演を通して，受講する教師の力量向上を図ることをねらいとする。

(2)　対象，人数，期間，会場，日程，講師

①　対象，人数，期間，会場：

１日目…小中学校の教職員 20 名，6 月 10 日，高知県四万十町立四万十小学校

２日目…小中学校の教職員 40 名，6 月 11 日，こうち男女共同参画センター「ソーレ」

②　日程：

１日目…３時間目　院生による小学校３・４年複式学級での出前授業

４時間目　異学年合同授業の参観

５時間目　院生による小学校３・４年複式学級での出前授業

６時間目　水落教授による講演

２日目…9:00～12:00　水落教授による講演，院生による発表，質疑応答

③　講師：水落　芳明

(3)　研修項目の配置の考え方

研修に参加した教師が「目標と学習と評価の一体化」を目指した授業デザインについて，理論面と実践面の両面から体感し，理解できるように研修項目を配置した。

(4)　研修について

前述した研修項目の配置に基づき，院生による出前授業と異学年合同授業の参観を通して得た成果を，講演の内容に写真やビデオ映像で直接盛り込む形でフィードバックすることで，受講者の理解を深化できるようにした。さらに２日目の講演では，さらに内容を高度化させ，「目標と学習と評価の一体化」を目指した授業デザインについて学術的な研究成果を引用して講演を行った。

(5)　受講者の感想など

・四万十町には小規模校が多く点在しているが，その状況を逆に生かして異学年合同の学び合い授業を行っていた。実際の授業の様子を参観して，ぜひ実践してみたいと感じた。

・アクティブ・ラーニングという言葉や内容は聞いていたが，水落先生の講演を聞いて，目標と学習と評価を一体化させることが子どもたちの主体的な学び合いに重要だと分かった。

・水落研究室の院生の授業を参観して，目標を子どもと共有し，子どもたちが全員で目標達成を目指して頑張っている姿に感心した。

(6)　今後の教師力の育成に向けた可能性

本研修では出前授業による実践面の内容と講演の理論面の内容をリンクさせて行った結果，受講者から良い評価をいただいた。このような研修会を通して教師力を育成していくためには理論と実践の両方を取り込んだ内容構成にすることが重要であることを実感した。

### 2-(2)-5 『学び合い』の授業実践と課題づくりワークショップ【村上市立村上第一中学校】

(1)　研修の背景やねらい

当初は村上第一中学校の数学科のみで『学び合い』によるアクティブ・ラーニングの飛び込み授業を実践する予定であったが，村上市の中学校数学科教員で構成されている数学教育研究会の希望もあり公開授業となった。そこで，『学び合い』の授業実践を２時間行い，子ども達の変容を教職員が参観し協議をすることを通して，学修者が能動的に学修し，汎用的能力の育成を図るアクティブ・ラーニングの授業の在り方について考えを深めることをねらいとした。

(2)　対象、人数、期間、会場、日程、講師

①　対象，人数，期間，会場：中学校 3 年生及び村上市・胎内市の中学数学教員，
中学生 35 名 指導主事･教員 17 名 上教大教職大学院生 5 名，
6 月 22 日，村上市立村上第一中学校

②　日程：13：35～14：23　　数学「平方根」の飛び込み授業
14：33～15：21　　数学「平方根」の飛び込み授業
15：50～16：40　　協議会及び課題づくりワークショップ

③　講師：福田　健（M2），橋本和幸（M2）

(3)　研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

授業を参観し，その後『学び合い』の理論を学び質疑応答することで，授業場面から想起しやすいと考えた。また，学年毎に分かれて，目標と評価の一体化を意識した課題を作成するワークショップを配置することで，参観職員の授業実践につながると考えた。

(4)　研修について

実践授業では，1 時間目は子ども達がゴールをイメージしやすい，教職員も取り入れやすいと考え，復習問題のプリントを教科担任に用意してもらった。2 時間目は実際の授業進度に合わせて「平方根」の単元での授業を実践した。

授業後の協議会では，『学び合い』の理論の紹介や質疑応答を実施。その後課題づくりワークショップを実施。学年毎に今後予定している授業範囲の授業場面を設定し，課題を作成した。その際右図の課題で『学び合い』による課題づくりを体験してもらった。

ここにいる全員が，次のことができる。
①ゴールと評価を意識した課題を１時間分作成する。
②作った課題を３人に見てもらいアドバイスをもらう。
③アドバイスをもとに，改良する。

(5)　受講者の感想など

・評価ポイントを明確にした課題設定の大切さを授業に生かしたい。
・可視化のポイントが少しわかったので，生徒への声かけを大事にしたい。
・１つの題材に対して，様々な先生方が意見を出し合うことで１人では考えられないような指導法が学べた。

(6)　今後の展開

本実践講座を参考にして授業実践したかを調査し，アクティブ・ラーニング実践前に教師の感じる疑問や実践するに至った動機等分析し，飛び込み授業と協議会の持ち方を改善する。

### 2-(2)-6 中学校における異学年合同授業【新潟市立中之口中学校】

(1) 研修の背景やねらい

異学年合同授業においては,アクティブ・ラーニングの実践を行いやすい。それは,アクティブ・ラーニングは,従来の授業でめざした教養,知識だけではなく「認知的,倫理的,社会的能力」の育成もめざすねらいとなっているためである。今回は,異学年での協同学習をベースに中学1～3年生を対象にアクティブ・ラーニングを行い,生徒が授業を体験し,教員が授業を参観して今後求められる「認知的,倫理的,社会的能力」の重要性を理解することをねらいとした。

(2) 対象,人数,期間,会場,日程,講師

① 対象,人数,期間,会場： 中学1・2・3年生（164人）,教職員（25人）,7月4日（月）,新潟市立中之口中学校

② 日程：3限目 10：45～11：35講演（内容：今後の入試改革の動向 少子高齢化との関連について）

4限目 11：45～12：35異学年合同授業1時間目

5限目 13：40～14：30異学年合同授業2時間目

③ 講師：西川純 佐々木譲 藤田純祈

(3) 研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

まず,講演会にて今後の入試改革,ひいては現代社会がどのように変わっていくのかといった内容を生徒・教職員に伝えた。そして授業で5分間この授業をなぜやるのか,どのようにしてやるのかといった説明を生徒に合わせて行った。「今後社会に出ていく際に必要なのは,他者と折り合いをつけ協働し課題や問題を解決していく力であり,その練習を学校の教科学習を通して行う。また,異年齢の人たちと働いていくことが当たり前の社会では,今回のような異学年合同授業は非常に意味がある。」ということを伝えた。部活動や実際に学校の職員室はそうした異年齢集団であることを伝え,異年齢での交流の重要性を実感してもらった。

(4) 研修について

授業の進め方としては,教師が教えることを主とするのではなく,周りの友人達と協働して課題解決を図ること,1年生から3年生まで全員が授業課題を解決することを伝えた。また,授業後には参観した教職員向けに異学年合同授業、アクティブ・ラーニングに関する質疑応答を行った。

(5) 受講者の感想など

・（生徒）普段,上級生と勉強することはあまりないので新鮮だった。困った時に周りの人たちが助けてくれて嬉しかった。

・（教師）これからの社会は、学力ももちろん大事だが人間関係形成能力が非常に大事になると感じている。そんな中でこうした異学年合同授業やアクティブ・ラーニングに積極的に取り組んでいきたいと強く思った。

(6) 今後の教師力の育成に向けた可能性

今回の研修をきっかけに,会場校では,少しずつ異学年合同授業や単学級でのアクティブ・ラーニングにも積極的に励んでいきたいと校長先生よりお言葉としていただいた。

### 2-(2)-7　小学校異学年合同によるアクティ･ラーニング出前授業【安曇野市立豊科北小学校】

(1)　研修の背景やねらい

次期指導要領改訂の注目すべきキーワードが「アクティブ・ラーニング」である。アクティブ・ラーニングは、教員の一方向的な講義形式の授業ではなく、課題の発見と解決にむけて主体的・協働的に学ぶスタイルであり、「認知的、倫理的、社会的能力」の育成もめざすねらいとなっている。そこで、アクティブ・ラーニングの一つである『学び合い』の出前授業において、子どもが主体的・協働的に学習する姿を参観することを通して、アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善のきっかけにすることをねらいとした。

(2)　対象、人数、期間、会場、日程、講師

①　対象，人数，期間，会場：小学校２・４・５年生（８３名）、教職員（２５名）
７月６日、安曇野市立豊科北小学校

②　日程：１１：４０～１２：２５　４時間目（授業第１時）異学年算数
１４：０５～１４：５０　５時間目（授業第２時）異学年算数
１５：３０～１６：４０　講演　「『学び合い』は簡単だ！」
１６：４０～１６：５０　質問等

③　講師：西川純、福田健、橋本和幸

(3)　研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

アクティブ・ラーニングの一つである『学び合い』の授業を見たことがある教師が多くないため、まず２時間、子どもたちが、主体的・協働的に学習するようになる変化を見てもらうために現職院生が授業を実施した。その後、講演では、授業中の教師の働きかけと、それに対する子どもの変化のビデオをもとに伝えた。

(4)　研修について

講演後はビデオの授業についてや今日参観した授業についての質疑応答を行った。質疑では「終わった子に教えるんだよとあるが、教えるスキルは何か伝えているのか。」「１年生においてノートにどう書くかを指導するのか。」「達成していない子がいるが、次時はどうするのか。そのまま進むのか。」「思考力はどうそだてるのか。」ということが挙げられた。

(5)　受講者の感想など

・教師の声かけ１つで、子どもが関わり始める姿はとてもびっくりしました。
・小学校には、授業が分からずに妨害する子、発達障害があり友だちと関係を作りにくい子がいるなか、『学び合い』はその両方をクリアできる授業だと思いました。
・勉強を通して、友だちとの関係づくりができるのは一石二鳥だと感じました。

(6)　今後の教師力の育成に向けた可能性

実際に自分たちがよく知っている子どもたちが変わっていく様子を見たことや、具体的な授業の始め方、授業中のポイントを知ったことで、授業改善のきっかけになったと考えられる。書籍を購入した教師が多かったことからも、アクティブ・ラーニングを自分のクラスで積極的に取り入れようとしている。授業のことで相談し合ったり、合同で授業したりすることで、教師同士の協働力を高めていくことが可能となっていくと考える。

### 2-(2)-8　小学校異学年合同によるアクティ･ラーニング出前授業【宮田村立宮田小学校】

(1)　研修の背景やねらい

次期指導要領改訂の注目すべきキーワードが「アクティブ・ラーニング」である。アクティブ・ラーニングは、教員の一方向的な講義形式の授業ではなく、課題の発見と解決にむけて主体的・協働的に学ぶスタイルであり、「認知的、倫理的、社会的能力」の育成もめざすねらいとなっている。そこで、アクティブ・ラーニングの一つである『学び合い』の出前授業において、子どもが主体的・協働的に学習する姿を参観することを通して、アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善のきっかけにすることをねらいとした。

(2)　対象、人数、期間、会場、日程、講師

①　対象，人数，期間，会場：小学校２・３・４年生（８８名）、教職員（２０名）
７月７日、宮田村立宮田小学校

②　日程：１３：４５～１４：３０　４時間目（授業第１時）異学年算数
１４：４０～１５：２５　５時間目（授業第２時）異学年国語・特別活動
１６：０５～１７：０５　協議会・課題づくりワークショップ

③　講師：西川純、福田健、橋本和幸

(3)　研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

アクティブ・ラーニングの一つである『学び合い』の授業を実践するために、まず２時間、『学び合い』授業の経験のない子どもたちに出前授業を実施し、主体的・協働的に学習するようになる変化を参観した。その後、協議会では、理論的なことを伝え、実際に授業で使うための課題づくりについてのワークショップを実施した。

(4)　研修について

協議会では、アクティブ・ラーニング『学び合い』について、最初に子どもたちに語ること、授業中教師がすること、終わりに子どもたちに語ること、よくある疑問や質問についてのプレゼンテーションを行った。その後、「すぐ使ってみたいと思えるようなゴールと評価を意識した課題を１つ作ってみよう」というテーマでワークショップを実施した。ワークショップでは、授業を実施したい単元や教材を選び、その１時間で身に付けさせてい力（ゴール）とその評価方法を学年ごとに考えた。

(5)　受講者の感想など

・待ち時間を持てあましている子ども達をどうしたらいいか、声かけの仕方、担任の目を向けるべき子ども（②：６：２）などが分かった。
・１年生が『学び合い』をするための具体的な方法がイメージできました。
・課題の作り方のヒントを教えていただけたので、チャレンジしてみたいと思います。
・教師の役割の中で、矢継早に子どもの反応を見つけ、つないでいくことが重要だと感じた。

(6)　今後の教師力の育成に向けた可能性

今回の出前授業・研修会をきっかけにして、会場校では『学び合い』を研究テーマに据え日々授業を実践している。異学年で授業をすることや、学年をこえて課題づくりをすることで、職員間の協働力を高めていくことが可能になっていくと考える。

### 2-(2)-9　『学び合う』関係性を促す授業並びに授業研究会【横浜市立永田台小学校】

(1)　研修の背景やねらい

教師の「一人残らず、わかるように授業を進めよう」という意気込みが、実は学習者の「学びにくさ」の要因になっているときがある。一人一人の理解の仕方は多様であるという立場に立てば、教師がよいと考える教え方はある学習者にはわかりやすいがある学習者にはわかりにくいという状態が考えられる。理解の多様性についてと多様性を理解した上での授業のあり方を考えることをねらいとした。

(2)　対象、人数、期間、会場、日程、講師

①　対象，人数，期間，会場：

教職員 24 名，小学 3 年生 22 名、小学 5 年生 24 名、7 月 15 日，横浜市立永田台小学校

②　日程：11:30〜12:15　小学 3 年生へ授業：算数「大きい数の計算」

13:50〜14:35　小学 5 年生へ授業：算数「小数のかけ算を考えよう」

14:50〜16:10　演習：『学び合う』完成生を促す授業について話し合う。

③　講師：阿部　隆幸

(3)　研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

学習者の多様性を前提にした授業のあり方が想像できないという教職員が多数だったために、小学 3 年と 5 年生で授業を行い、その授業を見た後に教職員で多様性を認める授業のあり方を話し合う授業研究会を行った。

(4)　研修について

演習では、参加者同士ホワイトボードで書き出せるシートに、実際の授業を見て感じたこと、考えたことを書き出しながら話を深めるという「ワールドカフェ」スタイルで互いの考えを交流し、実践につなげる試みをした。

(5)　受講者の感想など

・「一斉授業は教えた気になってしまう。学び合いは理解してる子と理解していない子の差がハッキリでる」との回答に、今まで沢山授業の準備をして、一斉で教えて教えた気になっていた自分がそこにいたことに気づきました。

・阿部先生は授業の中で『「教えてー」っていいね。「ありがとう」この言葉すてきだ』と子ども達の関わる姿をたくさん価値付けなさっていました。そして、学び合いの楽しさを伝え、時間の管理をする、まさにコーディネーターというか、整理する人でした。

(6)　今後の教師力に向けた可能性

本実践編講座をきっかけにして，会場校では，今まで以上に積極的に学習者中心の授業に取り組みその様子を外部に公開していく（次回は 9 月 6 日）という。今回の学びを学校全体でつなげていくという姿勢はよりよい将来を予見できる。

### 2-(2)-10 協同的に学ぶ考え方や技法について習得する研修会【新潟市立阿賀小学校】

(1) 研修の背景やねらい

アクティブ・ラーニングという言葉を筆頭に、学習者主体の授業が必要だと言われ、実際に必要感を感じている。しかし、いざ学習者主体の活動中心の授業を行っていこうとしたときにどのように授業を展開していったらいいのかわからない教員が多い。学習者中心の授業の考え方の一つ、協同学習を中心的に学習し、2 学期以降の授業で取り入れることができるようにすることをねらいとした。

(2) 対象、人数、期間、会場、日程、講師

① 対象，人数，期間，会場：教職員 12 名，7 月 28 日，新潟市立阿賀小学校

② 日程：10:00～11:30

③ 講師：阿部　隆幸

(3) 研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

学習者が主体となって活動的に学ぶ授業のあり方が想像できないという教職員が多数だったため、実際に体験的な活動をしてもらいながら、理論付けをしていく進め方で行った。

(4) 研修について

演習では、大きく２つの体験的な活動をしてもらった。一つは、教室内で学習者の信頼関係を促進する「ペアトーク」である。実際に体験してもらい、このよさと理論（考え方）を知ってもらうことである。

二つは、協同学習である。協同学習の研究者の中でスペンサー・ケーガンの考え方を紹介し、協同学習は単なるグループ学習ではなく４つの条件が全て包含されるときに協同学習と言えるということを知っていただき、それをもとに２つの協同学習の技法を使ったアクティビティを体験してもらった。

最後に、活動を取り入れた授業が子どもたちにどんな力をつけるのか、また、これからの授業にどのように取り入れることが可能かを話し合った。

(5) 受講者の感想など

・アクティビティが充実していたので、実際に体験して、よく理解できました。子どもの気持ちが想像しやすかったです。

・学習活動にルールや手順を設けておくことで、子どもたちを目標に向かって進められることが分かった。「みんながやらないとできない」や「協力しないと解決できない」という必然的に関われる仕掛けが必要だと分かった。

(6) 今後の教師力に向けた可能性

本実践編講座をきっかけにして，会場校では，今後も「協同」をテーマに授業実践を続け

ていくようになった。授業実践報告等でやりとりを続けていく予定である。

### 2-(2)-11 理解と表現の融合を目指したアクティブラーニング授業の開発研究会【神奈川学園中学校・高等学校】

(1) 研修の背景やねらい

国語の授業で解釈，理解した作品に関して，発表する場合，発表の表現活動が教科学習と遊離して，理解と表現が別の活動になり，学習の場にならないことがよくある。そこで文章の解釈，理解と言語表現活動が融合し，それによって作品世界を感じとることができる教育活動が必要である。その手法として群読を授業に取り入れ，群読脚本づくりからおこなうことによって，作品世界のイメージと表現を結び合わせていくアクティブラーニングの活動を参加者に体験してもらい，各自の授業に活かすことがねらいである。

(2) 対象、人数、期間、会場、日程、講師

① 対象，人数，期間，会場：27 名，小中学校教師，7 月 30 日，神奈川学園中学・高等学校

② 日程：13:20～ 本会の意義と理論の説明

13:50～ 演習（群読脚本づくりと練習）

14:40～15:20 発表とふりかえり

③ 講師：片桐史裕

(3) 研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

受講者は群読脚本づくりが未経験の人が多かったので，学習者役を体験し，授業に導入する時の注意点を各自探ってもらう機会を設けた。そして脚本づくりと練習に十分な時間が必要と考え，５０分という時間を配置した。

群読の題材は，小学校低学年，中学年の国語に掲載されている物語作品，地元神奈川県の民話の計３作品を用意し，各人の趣味趣向によって選んでもらうようにした。

(4) 研修について

演習では，まず全体で講師が用意した群読脚本２編を演じた。「役割よみ」の群読とコーラス入りの群読の２種類を体験してもらうことによって，演習の脚本づくりに活かしてもらうためである。脚本づくりの時間では，３つの作品に希望制で振り分け，１つの作品に１５人，その他は４人，７人となったため，１５人集まった作品に関しては，５人の班を３つ作り，それぞれの班で脚本を作ることにした。

各班で物語の自分の捉えたイメージを出し合い，話し合って群読脚本を作成し，発表した。

(5) 受講者の感想など

・同じ作品だが，とらえ方によって群読のイメージが全く違っているのが面白かった。

・当初時間が余るのではないか？と思ったが，時間があっという間に過ぎてしまい，練習の時間が足りなかった。時間配分がとても難しいと感じた。

・思い入れのある作品を選んだ。群読で表現することで，さらに好きになった。

(6) 今後の教師力の育成に向けた可能性

物語のイメージを知識として提供するだけでなく，声を出したり，体を動かすことで児童，生徒に体感させ，多様な視点で作品を捉えたり，表現活動を自分たちで評価することがアクティブ

ラーニングに繋がるのである。アクティブラーニングを教師自ら体験することで，自己の気づきが教室での授業に活かされていくのである。

**2-(2)-12,13「総合的な学習の時間」における「国際理解教育と郷土学習」の統合学習の単元開発に関する教員研修【佐渡市立佐和田中学校】**

(1)　研修の背景やねらい

世界のグローバル化が進展する中、日本の学校教育における国際教育の重要性が唱えられる一方で、その一つを担う国際理解教育を実践する学校は少なく、一部の教員が孤軍奮闘しているのが現状である。本研修では、そのような教師を支え、周囲の理解や協力を得られるような外部からの研修という形でのサポートの可能性を探った。対象校で 2 回の研修を行った。第 1 回目は、対象校第 3 学年 2 学期の「総合的な学習の時間」に実施する「国際理解教育と郷土学習の統合学習」の開始にあたり、学年部の教師全体で国際理解教育、参加型学習の基礎の共有を目的とした。第 2 回目は担当教師の単元目標達成のための単元及び授業の再検討を目的とした。

(2)　対象、人数、期間、会場、日程、講師

第 1 回　9 月 7 日（水）　会場：佐渡市立佐和田中学校

① 対象・人数：3 学年部及び英語科の教師 7 名，生徒 81 名

② 日程：13：35－15：25　参加型の国際理解教育の授業実施

16：10－16：50　ミニ講義「国際理解教育概論」

③ 講師：原瑞穂（准教授）、小黒淳一（M2・中学校英語科現職）、橋本勝（M2）、鷹野敏也（M1）中野裕子（M1・中学校英語科現職）

第 2 回　10 月 7 日（金）　会場：佐渡市立佐和田中学校

① 対象・人数：授業担当教師 1 名、3 学年部教師 1 名、JICA 職員 2 名

② 日程：13：25－14：15　「国際理解教育と郷土学習の統合学習」授業参観

14：25－15：20　授業の振り返り及びミニワークショップ「作戦会議」

③ 講師：原瑞穂、小黒淳一、橋本勝、鷹野敏也（同上）

(3)　研修項目の配置の考え方

［第 1 回］前半は原研究室で 3 学年生徒へ参加型の国際理解教育の授業を実施し、学年部の教師が参観した。後半は、国際理解教育概論としてミニ講義及び意見交換を行った。

［第 2 回］上記の「国際理解教育と郷土学習の統合学習」の単元開発のため、担当教師の授業を参観後、生徒の授業参加の姿を踏まえた上で、単元目標達成に向けて単元・授業の構成について、ミニワークショップ形式で検討した。

(4)　研修について

［第 1 回］前半は、「あなたのメガネはどんな眼鏡？」を実施した。生徒が多文化間に生じる摩擦や葛藤を追体験しながら、主課題の「外国からの転校生への自分のアクション」を通して、多文化共生社会における課題を自分事として捉え、協働して課題解決の道を探ると

第 1 回　参加型授業の提案

第 1 回　国際理解教育の講義

第 2 回　課題解決型の協議

いう授業方法及び生徒の姿を見てもらった。後半は、国際理解教育の歴史的経緯と意義、教科・領域横断的な単元や授業の可能性に関する講義及び意見交換を行った。

［第 2 回］まず、授業参観による生徒の学びの様子を振り返り、続いて単元目標の達成に向けて、単元の特徴と意義、今後の見通し、留意点について確認した。今後の生徒による地元商店街のパンフレット作成プロジェクトに向けて、作戦会議と称して参加者全員でパンフレット作成の意義と目的、対象、効果的な内容・形式について、模造紙に各自が思い浮かべたキーワードやコメントを書き込み、ウェッビングを行った。その後、この活動自体が「生徒自身が課題を自分事として捉え、能動的に考え、意見を出し合い、協働して課題解決への道を探る」という参加型の課題解決のプロセスであり、それを教師及び研修参加者自身が身を持って体験し、その意義を理解してもらう目的であったことを共有した。

(5)　受講者の感想など

・授業参観だけではなく、事前から多くの助言をもらい、何度か生徒の心を揺さぶることができた。これまでインプットの多い授業だったが、この知識や考え方をどう活動して生徒が主体的に佐渡の課題に向き合うか、今後の授業の目的を明確にしつつ、生徒たちの思いを存分に引き出す授業を行いたい。（佐和田中学校教師、以下「佐」）

・国際理解教育の歴史的経緯よりも学校現場での様々な実践を聞きたかった。（佐）

・生徒の行動には、実際にそれが必要とされているか、生徒たちの気持ちを入れるための準備や行動後の成果に立ち会えるかといった点に非常に納得した。（JICA 職員、以下「J」）

・教師の授業計画を専門的な立場から分析しアドバイスをもらうことで、今後の授業の質を高められる。他の教員の授業を行う際にも今回のような講座を併せて実施できると良い。（J）

・生徒に国際理解の必要性を感じる場を設定すること、授業後の感想にお手本のような文章ではなく実際に行動しようという気持ちを持たせること、行動を起こさせることが国際理解教育の課題であると考えた。（原研究室、以下「研」）

・大学側も実践結果ではなく、計画や実践過程に関わり、自分事として捉え、題材や単元、授業の構想を協働して練り上げることを通して、国際理解教育の魅力や要点を再確認、再構成できた。（研）

・授業後の研修時間の確保が課題。効率性よりも、内容を吟味し、深い議論にしたい。（研）

・担当教師と大学側の個人的なつながりで研修を実施する場合、管理職等の理解がなければ、他の教師の協力が得られないなど、職員がチームとして機能しないことを確認した。（研）

(6)　今後の教師力の育成に向けた可能性

1 回目は、対象校の教師に対し、参加型授業での生徒の様子及び講義を通して自身にも実施可能性を見出してほしかったが、達成されなかった。特に講義は提案した授業との関連が不明瞭で、教師が自分事として捉えられる内容ではなかった。そこで 2 回目は講師が担当教師の単元・授業案に即して分析、見解を示すとともに、参加者が単元目標達成のための一員として役割を担う、解説＋課題解決型の検討会とした。国際協力の専門家の視点も加わり、複眼的に課題が捉え直された。以上から、学年部等の多くの教師対象の研修では、担当教科外であっても教師自身の当事者性を担保した課題設定及び内容構成が肝要であると考える。単元開発では、学習内容の充実化及び担当教師の挑戦を支える上で、授業実施前から外部の専門

家集団も目標と課題を共有し検討を重ねるという協働的な研修体制が有効であると考える。

**2-(2)-14 授業づくりと学級づくりの連動による協働性の高まり【飯田市立旭ヶ丘中学校】**

(1) 研修の背景やねらい

当校は，学級集団の機能向上による学力の向上をねらっている。授業の協働化を促進するためには，学級集団の質的向上が望まれる。しかし，協働的問題解決能力を育む理論と実践については，十分な理解が得られていない実態がある。授業参観や教師への個別相談を通して，協働的問題解決能力を育む集団をあり方と育て方を理解することを目的とした。

(2) 対象、人数、期間、会場、日程、講師

① 対象，人数，期間，会場：中学校教職員 30 名，10 月 12・13 日，飯田市立旭ヶ丘中学校

② 日程：

10 月 12 日：１３：３０～１４：２０　Ｔ教諭（理科）の授業参観

１４：３０～１４：４５　Ｔ教諭が担任する２年３組の短学活参観

１５：０５～１６：４０　研修：第２回学級づくり研修会

Ｔ教諭の実践発表（２０分），講演（７５分）

１６：５０～１７：２０　当該事業参加教諭と校長と懇談①

13 日：　９：４０～１０：３０　Ｋ教諭（数学）の授業参観

１０：４０～１１：３０　Ｎ教諭（理科）の授業参観

１１：４０～１２：３０　Ｓ教諭（１学年主任）への指導

「協働を育む学年集団づくり」について

１３：１０～１３：２５　当該事業参加教諭と校長と懇談②

③ 講師：赤坂真二

(3) 研修項目の配置の考え方

日程の通り，全体講演だけでなく当校の実践を踏まえた上での個別指導，または，学年体制づくりに関する相談を含め，実態に即したコンサルテーション的機能を果たす研修を意図した。

(4) 研修について

当該事業参加教諭の授業を参観した後，それに基づき学級集団づくりの観点から今後育てるべき能力などを助言した。また，全体研修では，学級集団づくりにおいて全校で共有すべきことを講義と演習で伝えた。

(5) 受講者の感想など,研修後の校長のコメントを以下に示す。

２日間，本校の教職員に熱心にご指導いただいたこと，ほんとうにうれしく，感謝申し上げます。ありがとうございました。

（１）「学習コミュニティー」をつくる

（２）「学び方課題」を意識しながら全職員で取り組む

先生にご指導いただいた，このことは校長としての私に強く響きました。熱意と粘り強さを持って，本校の先生方と共にがんばっていきたいと改めて思いました。ほんとうにありがとうございました。

(6) 今後の教師力の育成に向けた可能性

中核的な働きをする教師が，授業づくりと学級づくりの連動に関する基本的な考えを得たこと

で，今後は他の職員にもその理論と実践が共有化され学校体制が整うことが期待できる。

**2-(2)-16 高等学校におけるアクティブ・ラーニングの授業実践と協議会【栃木県立さくら清修高校】**

(1) 研修の背景やねらい

アクティブ・ラーニングは,従来の授業でめざした教養,知識だけではなく「認知的,倫理的,社会的能力」の育成もめざすねらいとなっている。今回は,アクティブ・ラーニングの一つである『学び合い』の出前授業を行い,生徒が授業を体験し,教員が授業を参観して今後求められる「認知的,倫理的,社会的能力」の重要性を理解することをねらいとした。また近隣中学校の 10 年研修の教員も参観した。

(2) 対象,人数,期間,会場,日程,講師

① 対象,人数,期間,会場： 高校 2 年生（21 人）,参加教職員（12 人）,10 月 12 日（水）,栃木県立さくら清修高等学校

② 日程：4 限目 11：55～12：45 授業 2 年国語（現代文）
5 限目 13：40～14：30 協議会

③ 講師：藤田純祈

(3) 研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

アクティブ・ラーニングの一つである『学び合い』の授業を実践するために、本格的な『学び合い』授業の経験のない子どもたちに出前授業を実施し、主体的・協働的に学習するようになる変化を参観した。授業の開始時に，この授業をなぜやるのか,どのようにしてやるのかといった説明を生徒に合わせて行った。その後、協議会では、質疑応答や，理論的なことを伝えた。

(4) 研修について

授業の進め方としては,教師が教えることを主とするのではなく,周りの友人達と協働して課題解決を図ること,全員が授業課題を解決することを伝えた。さらに，本当に理解するとはどういうことか？という問いを投げかけ，考えた。また,授業後には参観した教職員向けにアクティブ・ラーニングに関する質疑応答を行った。

(5) 受講者の感想など

・（生徒）自分たちで考えて答えを出さないといけないので，普段よりたくさん頭を使ったと思う。分からないことは友だちと一緒に考えられるので，最後には理解できた。楽しい授業でした。

・（教師）アクティブ・ラーニング『学び合い』の授業での，課題の設定（提示）の仕方や，声掛けの仕方が，勉強になった。社会に出ていくと，学力ももちろん大事だが，人との関わり方や，コミュニケーション能力が非常に大事になると感じている。授業を見る前は，人間関係形成能力を高めたいが，入試や定期考査に対応できないのでは？と言う不安があったが，その不安が無くなった。普段の授業では見ることができない，生徒たちの生き生きとした学びに向かう姿があった。一つのスタイルとして，アクティブ・ラーニング『学び合い』を積極的に取り組んでいきたいと強く思った。

(6) 今後の教師力の育成に向けた可能性

今回の研修をきっかけに,会場校では,少しずつアクティブ・ラーニングに積極的に励んで

いきたいと校長先生よりお言葉としていただいた。

### 2-(2)-16 生徒相互交流による課題解決学習【西尾市立平坂中学校】

(1) 研修の背景やねらい

西尾市立平坂中学校は，目指す生徒像に迫るために「いきいきと学び　主体的にかかわり合いながら　自己を表現する子の育成　～「見える化」による指導と評価の一体化～」という主題のもとに研究を進めている。研修参加者が，学校をあげて行われる新しい授業づくりを見学し，同日に行われるシンポジウムに参加することで，アクティブ・ラーニングに対応した授業のあり方について理解することを目的とした。

(2) 対象，人数，期間，会場，日程，講師

① 対象，人数，期間，会場：同市の教職員，200 名程度，10 月 13 日，西尾市立平坂中学校

② 日程：２・３校時　　院生による出前授業

13:15～13:35　全体会Ⅰ　研究発表

13:50～14:40　公開授業（22 学級）

14:55～16:20　全体会Ⅱ　シンポジウム

③ 講師：上越教育大学教職大学院教授　　水落　芳明

国立教育政策研究所教育課程研究センター

研究開発部学力調査官・教育課程調査官　藤本　義博

愛知県総合教育センター研修部長　　平井　克明

(3) 研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

研究主題に即した出前授業と，校内研究全体会・授業参観・シンポジウムの一連の授業検討を通して，生徒相互交流による課題解決学習のあり方を理論と実践の両面から理解できるように配置した。

(4) 研修について

全体会Ⅰではアクティブ・ラーニングの授業で見られるべき学習者の姿や教室の様子についての説明を行い，公開授業の視点を提示した。その後，参加者はその視点が同校の授業にどのように具体化されているのかを参観した。全体会Ⅱ（シンポジウム）ではそれぞれのシンポジストが研究者としての観点，わが国の教育政策の観点，愛知県の教育施策の観点など，多角的な講話を設定した。

(5) 受講者の感想など

・事前に視点が示されたことで，授業を参観する際に，「このことを言っていたのか」と容易に気づくことができた。

・それぞれのシンポジストの違う立場からの話が興味深かった。同校の公開授業について様々な見方を吸収することができた。

・全校の向かうべき方向性がはっきりしていて，校内研究の進め方の一つの模範を見ることができたと思う。このようにして，チームで，個人で力を高めていきたいと思った。

(6) 今後の教師力の育成に向けた可能性

講師や指導者が授業の後で説明，指導・助言をするだけでなく，事前に視点を提供するということに意義があると考える。こうした構成にすることで授業を見る目が養われ，自分自

身の授業改善に繋げることができるであろう。

**2-(2)-17,18,19 「全員参加・主体的協働的に力をつける授業」の実現に向けた「チーム英語科」結成の布石のための教員研修【学校法人中越学園 中越高等学校】**

(1) 研修の背景やねらい

対象校が抱える課題解決のため、「全員参加・主体的協働的に力をつける授業」の実現に向けた「チーム英語科」結成の布石を目的とし、授業検討、授業実践及び協議会を行った。

(2) 対象、人数、期間、会場、日程、講師

対象：学校法人中越学園中越高等学校英語科教師、人数：教師 13 名、生徒 38 名（2 年 5 組）

期間：平成 28 年 10 月～11 月、会場：学校法人中越学園中越高等学校

日程：第 1 回 10 月 19 日（水）13：00-13：45　英語科教師と顔合わせ及び情報交換

13：55-14：40　英語科教師 A による英語科公開授業

14：45-15：10　原研究室メンバーでリフレクション

15：15-16：00　英語科教師と授業のリフレクション及び協議会

第 2 回 10 月 31 日（月）13：00-13：45　原研究室による英語科公開授業

13：50-16：10　原研究室メンバーでリフレクション

16：15-17：00　英語科教師と授業のリフレクション及び協議会

第 3 回 11 月 22 日（火）14：50-15：35　英語科教師 A による英語科公開授業

15：40-16：00　原研究室メンバーでリフレクション

16：15-17：30　英語科教師と授業のリフレクション及び協議会

講師：原瑞穂（准教授）、小黒淳一（M2・中学校英語科現職、第 2 回公開授業実施）、橋本勝（M2）、鷹野敏也（M1）、中野裕子（M1・中学校英語科現職、第 2 回は欠席）

(3) 研修項目の配置の考え方

各回ともに公開授業と協議会で構成した。第 1 回では、教員 A の公開授業、協議会を行い、対象校英語科の課題を明らかにして共有し、今後の研修方針・内容を設定した。第 2 回では、第 1 回研修で共有した課題を踏まえ、原研究室で授業案を作成して公開授業を行い、英語科教員に参観してもらい、協議会を行った。第 3 回では、先の研修で共有した課題及び提案を踏まえ、教員 A による 2 回目の公開授業、協議会を行い、全 3 回の公開授業から得た気づきを自分の授業改善に結びつけ、今後の目標を設定、共有することを教師間の意見交流を中心に進めた。

(4) 研修について

第 1 回は教員 A の公開授業（読解、all English）及び教員との協議から英語科の課題を絞り、授業に関しては「全員参加の授業」「主体的・協働的に力をつける授業」、教員集団としては「チーム中越高校英語科」結成のきっかけとすることを今後の研修の目標として設定した。第 2 回は第 1 回の協議での意見及び教員 A の「生徒が学んだことが不明確だった」という課題を踏まえ、「一貫性のある目標と評価の設定と共有」「学びの多様性の担保」「考える活動の設定」を授業改善の柱として授業案を練り、英語科教員が授業及び生徒の授業参加の姿について見直すきっかけとすべく公開授業を実施した。授業は小黒が教員 A と同様に読解の授業を all English で行い、授業後に振り返り、第 3 回に向けての課題と目標について協議した。課題として「すぐに答えを写す生徒」「他と交わろうとしない生徒」「文法解説でも主体的に学べる工夫」が挙げられた。第 3 回では、再び教

員 A による公開授業（読解、all English）を行った。協議では各々の授業改善及びチームづくりのための布石を目的とし、グループ毎に、教員 A の授業を振り返り、次に自分の授業を振り返りながら①普段の授業の現状、②今後への影響、③その原因、③解決への手立ての 4 段階で授業改善への課題と方法について意見を出し合い､最後に各自が研修を踏まえて今後に活かしたい目標を掲示し、共有した。目標には「英語科内での目標の明確化と共有」なども挙がり、教員がお互いの目標にじっと見入る様子からは、今後の英語科教員による体制づくりへの兆しが見られた。

(5)　受講者の感想など　（※各コメントの後に概要を［　］に示す。）

・考えるのに手間がかかりそうな Open Question を 3 つの中から 1 つだけで良いという贅沢な使い方に驚いた自分に対し、「生徒の興味・関心を引くことを目的に置く」意識がなかったと実感した。→［学びの多様性の担保］

・普段の授業内容が教員中心、内容よりも授業進度を優先にしている傾向があったので、内容理解を更に充実させるために、様々なタスクやペア、グループ活動を組み込んでいく必要があると感じた。→［生徒主体の学習活動の必要性］

・Task に取り組む活動では、ほぼ全員が積極的に考え、取り組んでいた。ただ、教科書を見て写すことがメインになってしまい、生徒がどの程度頭を使っているのか疑問に思った。間違い探しやパズルのようなものを“英語”で行っている状態のようにも見えた。良い活動には適正のレベルが必要だと思った。→［全員参加が可能な学習形態と課題のレベルの適正さ］

・目標設定を英語科としてしっかり決めることの大切さを感じた。／本校生徒に対して単語・文法、読解だけでなく、関心・意欲・態度も将来の為にも成績に入れるべきだという確信とその方向性のヒントが得られた。／英語科としての思いを全体で共有し、同じ思いを持っていたことに気づくことができ、一歩を踏み出すきっかけを得られた。→［英語科としての方向性］

・校内だけでなく、外部からの目を入れることにより、新たな発見や気づき、課題を見つけることができ、勉強になる機会だった。自分自身の授業を振り返り、見つめ直す良いきっかけとなった。→［外部の教育研究機関の有用性］

(6)　今後の教師力の育成に向けた可能性

本研修は、原研究室の院生と全 3 回の研修を企画運営した。1 回目は課題の把握、2 回目は課題を踏まえた提案（院生による公開授業）、3 回目は課題改善のための話し合いを主とした。3 回目にようやくお膳立てされた研修を脱し、教員が主役となった。各自が同僚と意見を交わす中で自らの課題や英語科の課題を洗い出して改善策を講じ、今後連携して取り組もうという思いが教員の内から生まれていた。授業改善もチームづくりも多くの学校が抱える課題であるが、即時解決できる便利な理論や方法はない。本研修における大学の役割は、対象校での観察や意見交換と研究室での分析検討をくり返しながら課題の特質を見極めて目標を設定し、対象校の実態に応じた研修を重ねることであった。この試みから、大学は「知」を授けることが主ではなく、当事者である教員と共に課題や目標に対して必要な「知」を互いに提供し合い、「知」を生み出す場を創造するファシリテーターとなり得ることがわかった。他方、課題も残る。毎回の公開授業は各教員が自身の授業を振り返るために重要な素材となった。しかし、全 3 回の単元案及び授業案考案においては教員との協働体制を取ることができず、授業づくりに関する課題については解決策を見出すまでに至らなかった。今後、授業づくりにおいても、学校課題に即して知を出し合い、案を練り上げるプロセスを共有す

るなど、協働的な関係性で実施する研修の方法及び可能性についても探究したい。

**2-(2)-20「目標と学習と評価の一体化」した授業提案【静岡市立大里西小学校】**

(1)　研修の背景やねらい

『学び合い』の考え方に基づいた「目標と学習と評価の一体化」した授業について，院生による授業提案を行う。子どもたちには，仲間と一つの目標達成に向かって協力して学習方法を考え，進めていくことの楽しさや心地よさを体感してもらうこと，大里西小学校の職員には，実際の子どもたちの姿を参与・観察したり，事後研修会で授業を振り返り話し合ったりすることで，「目標と学習と評価の一体化」した授業の良さを体感してもらうことをねらいとした。

(2)　対象、人数、期間、会場、日程、講師

①　対象，人数，期間，会場：

［公 開 授 業］静岡市立大里西小学校 2 年 4 組 29 名･3 年 1 組 30 名･5 年 2 組 32 名，11 月 14 日，各教室

［事後研修会］静岡市立大里西小学校職員，31 名，11 月 14 日，パソコン教室

②　日程：13:55～14:40　公開授業　2 年 4 組：国語科　3 年 1 組：理科　5 年 2 組：社会科

15:00～16:30　事後研修会（授業を基にした講演・小グループによる振り返り等）

③　講師：水落芳明

授業者：久能潤一（2 年 4 組国語）　岸　亮（3 年 1 組理科）　松澤健彦（5 年 2 組社会）

(3)　研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

同年 7 月に同小学校において，上越教育大学・水落芳明教授による「目標と学習と評価の一体化」した授業についての講演があった。その講演で述べられた理論を基にした実践として本授業提案を行ったため，会場校の職員にとっては，理論から実践へとつながる様子を，子どもたちの実際の学びの姿から参与・観察からすることができる研修の場となった。このことから，本研修は研修時期・研修内容ともに適切な配置だったと考えられる。

(4)　研修について

3 学級とも，授業開始前に本時の目標を板書した。こうすることで，教科書を開いて予習をしたり，目標を話し合ったりする子どもが出始める。しかし，休み時間中であるため，それは強制ではなく，子どもたちの判断に任せられる。授業開始後 5 分以内で目標と評価方法・評価基準・評価時期について明示し，あとの学習は子どもたちに任せた。また，教師が子どもたちのよい姿（「地上の星」）や問題行動等もその都度取り上げ，学級全体へとフィードバックする姿を見せることで，授業の内容だけでなく，学級経営に関わる面においても会場校の職員に提案できた。事後研修会では，各授業における子どもの姿と教師の対応を基に振り返ることで，「目標と学習と評価の一体化」した授業のイメージを会場校の職員がもつことができた。

(5)　受講者の感想など

・今回のように，授業の中で教師が子どもたちを評価する場面を設けるという授業構成を初めて見た。これからの自分の授業でも取り入れていきたい。

(6)　今後の教師力の育成に向けた可能性

会場校では，すでに「目標と学習と評価の一体化」した授業を中堅・若手職員が中心となり実践をしている。本研修会を通して，「目標と学習と評価の一体化」した授業の理解が深まった。ベテラン職員の感想から，中堅・若手職員を中心として「目標と学習と評価の一体化」の理論と授業実

践が往還され，その輪がベテラン層にも広がる可能性を感じ取ることができた。

**2-(2)-21　中学校におけるアクティブ・ラーニングの授業実践と協議会【八戸市立長者中学校】**

(1)　研修の背景やねらい

アクティブ・ラーニングは,従来の授業でめざした教養,知識だけではなく「認知的,倫理的,社会的能力」の育成もめざすねらいとなっている。今回は,西川純先生の講演の後，アクティブ・ラーニングの一つである『学び合い』の異学年合同授業を行った。生徒が授業を体験し，教員が授業を参観して今後求められる「認知的,倫理的,社会的能力」の重要性を理解することをねらいとした。また職員以外に保護者も参観した。

(2)　対象、人数、期間、会場、日程、講師

①　対象，人数，期間，会場：中学生 1～3 年（100 人）,参加教職員（12 人）
12 月 1 日（木）,青森県八戸市立長者中学校

②　日程：：2 限目　9：40～10：30　西川純先生　講演会
3 限目　10：40～11：30　授業　1 年理科　2 年社会　3 年国語
4 限目　11：40～12：30　授業　全学年　体育
5 限目　13：40～14：30　職員研修

③　講師：仲本卓史（3 限），米田優衣（4 限）

(3)　研修項目の配置の考え方

講演会で，今後の社会の厳しさを伝え，「誰一人見捨てられない」ことの大切さや，なぜ『学び合い』の授業をするのかを確認した。本校ではあまり取り組まれていない異学年合同の『学び合い』を実践し，学年や男女を意識せず，主体的・協働的に学習するようになる変化を参観した。

(4)　研修について

午後の校内研修では，午前中の授業や日頃の実践からの疑問や課題を，グループで出し，西川純先生に質問し回答して頂いた。各グループにゼミ生が一人ずつ入ることにより，大学でインプットしたことをアウトプットすることができる良い機会になった。

(5)　受講者の感想など

・定常的に『学び合い』を実践しているということで，大切な語りを端折ってしまった。授業後に，「語りの 5 分間では普通は時間が足りない」「余計なことを言う時間があると言うことは，生徒への思いが足りない」との指摘を受けた。語りの大切さを再確認できた。

・全校体制で『学び合い』を実践していると言っても，教師の取り組み度合いは様々であった。課題の作り方や見取りなど深い疑問や，実践したいけどまだまだ心配等の意見が聞け，今後支援校等で，様々な現場の先生に対してのアドバイス等の参考になった。

(6)　今後の教師力の育成に向けた可能性

長者中学校は定常的に『学び合い』を実践しているため，生徒の動きは素晴らしかった。授業を担当することにより，逆に生徒から良い雰囲気の『学び合い』を勉強させてもらったという感じでした。良い経験になりました。今後も機会をつくり，授業参観や飛び込み授業をさせて頂きたいと思います。

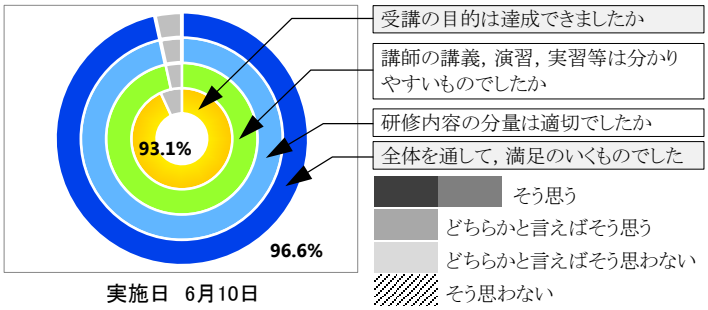
４　研修の評価方法、評価結果

(1)　理論編研修

| |
|---|
| **第１回　６月１０日（金）　協同を育む学級づくり　～群読とリーダーシップが秘策～** |
| 講義　「群読で学級づくり」　講師　准教授　片桐　史裕 |
| 講義　「アクティブ・ラーニング時代のリーダーシップ」　講師　教授　赤坂　真二 |

**講座のねらいの達成度**

子どものよりよい人間関係を育む学級づくり，教科学習に共通する「協同を育む」の理解をねらいとしました。アンケートには，「自身の学級経営を振り返る良い機会となった」「明日からの学級づくりに生かしたい」という記述があり，ねらい通り協同を育む視点が得られ，学級づくり実践への活力もみられることから，ねらいは達成できたと思われます。



実施日　6月10日

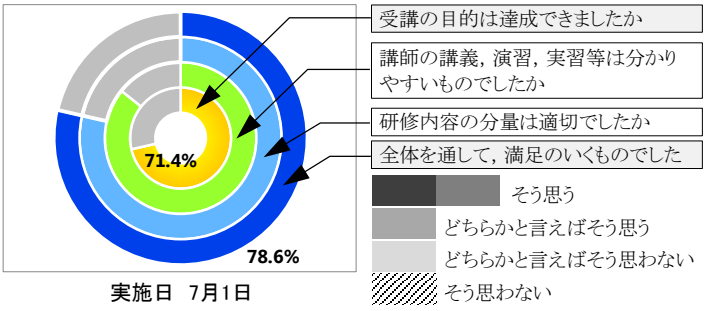
**受講者の様子**

受講者自身が活動する場面（発声，話合い，発表）が多く，後半の講義では受講者同士が「具体的な手立て」について相談する場面が 25 回も設定されていました。講師のリードが上手く，その都度，受講者同士が主体的・対話的に話されている様子が印象的でした。「活力が湧く良い機会となった」という感想から，教師のアクティブ・ラーニングであったと考えられます。

| |
|---|
| **第２回　７月１日（金）　職員の協働を育む学校づくり　～異学年学習と「Ｗｅ」が決め手～** |
| 講義　「小小・小中・中高連携の可能性」　講師　教授　桐生　徹 |
| 講義　「Ｗｅでつくる学校」　講師　教授　水落　芳明 |

**講座のねらいの達成度**

指導方法に対する不断の見直しの中，新たな知見を取り入れることをねらい，異学年合同授業，目標の共有＋責任の分担の中で子どもと教師も含めた「Ｗｅ」の関係づくりについてご講義をいただきました。受講者のアンケートには，課題の認識，新たな課題の発見があるだけでなく，「小中併設校の可能性を感じ，職員の目標の共有，協働をすすめたい」「明日からの活力をもらえました」という感想がみられ，ねらいは達成できたと思われます。



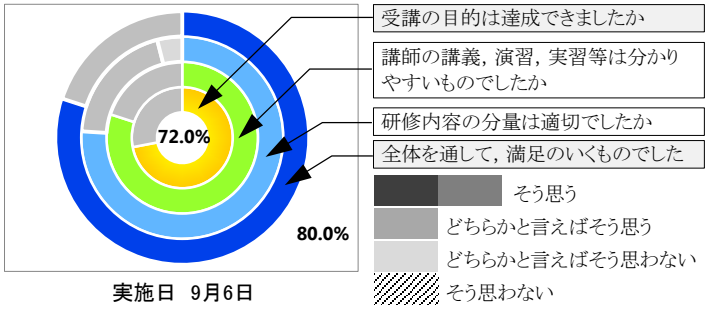
実施日　7月1日

**受講者の様子**

講座タイトルに「職員の協働」というキーワードが入っていたことから，第１回の受講者アンケートの感想を受けて，開講式における必要な説明はコンパクトにし，受講者の協働がすすむように開講式でアイスブレイクを行いました。受講者感想からは，アクティブ・ラーニングとして研修できたと感想をいただき，講師の先生からも，後の演習の場面で協議がすすみやすかったと好評でした。

| 第３回　９月６日（火）　新しい高校教育の夜明け　～18 歳選挙権とアクティブ・ラーニング～ |
|---|
| 講義　「主権者教育と政治教育」　　講師　副学長兼教授　廣瀬　裕一 |
| 講義　「サバイバル・アクティブ・ラーニング」　　講師　教授　西川　純 |

**講座のねらいの達成度**



実施日　9月6日

「権利を少しずつ子どもに，そして責任を負うことの必要性を感じた」などの感想から，法的観点と教育的観点を踏まえた主権者教育のあり方を，教師の姿勢を中心に考えるというねらいは達成できたと思われます。

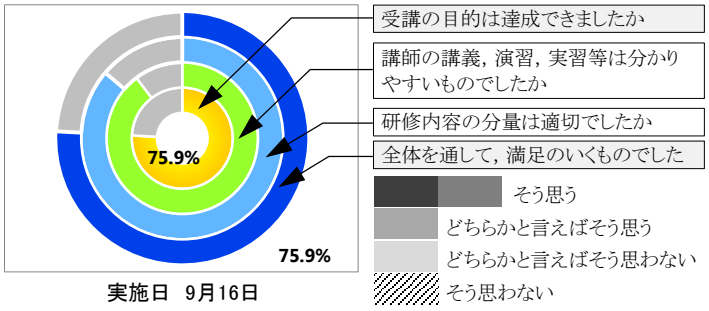
また，「『学び合い』の授業の良さやイメージがもてた」「トップの生徒のやる気づけから全体指導へつなげるということは勉強になった」などの感想から，高校における授業改善の中核となるＡＬの実践と子どものこれから生きる社会との関連性などへの理解というねらいは達成できたと思われます。

**受講者の様子**

「18 歳の学生の推定投票率は？」については，グループ協議をおこない，受講者がプレゼンを行った。グループ協議「ＡＬをやるとしたらこんなことが不安」では，各グループからの多く質問に，講師より即座に回答していただけたことは，深い理解にとても有効であったと思われます。

| 第４回　９月１６日（金）　協同的な学びによる学力向上　～考える・かかわり合う学習デザイン～ |
|---|
| 講義　「「読みの交流」の学習デザイン」　　講師　准教授　佐藤　多佳子 |
| 講義　「個別と協同の往来に着目した学習デザイン」　　講師　准教授　阿部　隆幸 |

**講座のねらいの達成度**



実施日　9月16日

「アクティビティを通して「読むこと」は面白いと感じ，他の方々と話をしたり，発表を共有することで広がりや深まりを実感した」という感想から「考えること」「他者と関わること」が，学習者主体で行われるための学習デザインを考えるというねらいは達成できたと思われます。

「理論と体験を交えて協同学習というものを理解できました。」「ペア，グループでの話し合いの学びの質の違いを感じることができた。」という感想から，個別的な指導から，個別と協同の往来に着目した学習デザインを考え合うというねらいは達成できたと思われます。

**受講者の様子**

午前・午後とも，確かな理論による講義と豊富なアクティビティ（活動）がテンポ良く組み入れられていたため，受講者は，学習デザインで目指す授業を実際に体験することで，実感を持って，理論・実践の往来のもとに講義を受けることができ，感想からは気づきも多く，受講者自身にとって主体的・対話的で深い学びの一日であったと思われます。

(2)　実践編研修

〇調査対象：実践編研修を受けた学校

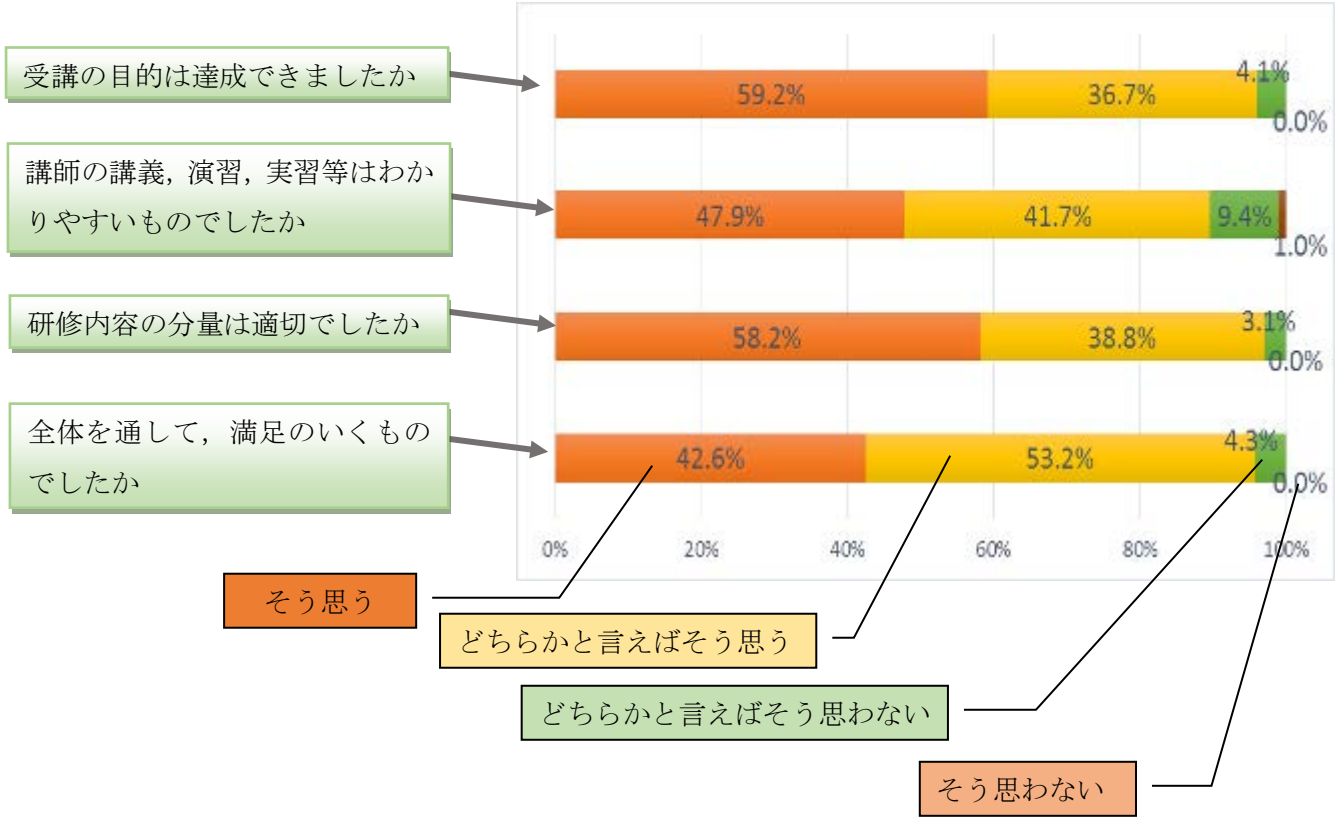
小学校１校（１７名），中学校３校(６３名)，中高一貫校(５名)

高等学校　（１４名），合計９９名

〇回答者の職能

| 職能 | 回答者数 |
|---|---|
| 教諭 | 46 |
| 進路指導 | 6 |
| 情報教育 | 6 |
| 教務部 | 6 |
| 研究主任 | 5 |
| 校務主任 | 3 |
| 特別支援 | 3 |
| 校長･教頭 | 3 |
| 教科主任 | 2 |
| 国際理解 | 2 |
| その他 | 3 |
| 無記入 | 12 |

〇　質問に対する４件法による回答



○講座に対する願い

・次期指導要領で求められるアクティブ・ラーニングの授業の具体像(中，研究主任)

・アクティブ・ラーニングとは具体的にどのようなことかを知りたい。(中，数学)

・学級の子がみな，成長できるクラスにするため。自分の経営方針を見返すため。(中，数学主任)

・次のクラス作りは失敗しないように，いろいろなセオリーや方法を蓄積する。(中，英語)

・「目標と学習と評価の一体化」がどの学年のどのクラスにも効果的に働くか確かめたかった。(小)

・主体的に学ぶ子どもたちを育てるにはどうしたらよいか学びたいと思ったから。(小，外国語)

・生徒に異文化についての理解を深めることで英語を用いたコミュニケーションに関してより興味を持ってもらいたい。(中高，英語)

・異文化理解という題材で，どのような授業展開をして，生徒にどのような刺激を与えてくれるのか，興味津々で参加しました。(中高，英語)

・自分の今までの授業における活動内容やタスクを見直す。(高，生徒指導)

・自分の授業力向上と科全体の”チーム意識”向上。(高，教務部)

○受講したことにより得られた成果

・今までの自分の価値観と異なる視点をもつことが大切だと気づかされました。(中高，生徒指導)

・生徒の外発的動機付けを高めるために様々な活動の中で反復して達成感を得られる様な体験をつくる。(高，生徒会顧問)

・子どもの活動のさせ方が少し見えた気がします(小)

・学級づくりをする上で必要なルールとリレーションのもとになるものが何かを学ぶことができた。(中，数学)

○受講したことにより新たに得られた課題は何か

・国語科における AL の模索（特に「読むこと」について）(中，国語)

・ICT にはできない役割(子どもを見とる、かかわらせるなど）をどう形にするか。(中，英語)

・子ども同士の学び合いだけにまかせていると教科のねらいが達成できなかったり、まちがったままになってしまったりすることがあると思われるが教師側がどう支援していいのか考えさせられた。(小)

・自分ならば，どう授業展開していくだろうか，ということです。(中高，生徒指導)

・教師がその活動で目指すべきもの（共通のねらい，ＣＡＮ－ＤＯなど）を時間がかかるとしてもつくる必要性を感じた。(高，教務部)

○実践編研修を受けて，受講者の感想

・普段の授業内容が，教員中心，内容よりも授業進度を優先している傾向があったので，内容理解を更に充実させるために，様々なタスクやペア，グループ活動を組み込んでいく必要があると感じました。大変意義深いものでした。ありがとうございました！(高，英語)

・実際の授業を見て、考えることができたので、イメージしやすかった。(小，教頭)

・なぜ中 1 は騒がしいのか，年齢的な問題もそうかもしれないが，ルール設定をし，守ることができていないことがわかった。それをいかし，経営していきたい。またパイプのつなぎ方の重要性は改めて感じたのでそれをどう実践するか考えていきます。(中，特別支援)

５　研修実施上の課題

本プログラムは，長野県総合教育センターで実施した過去の研修から「実際の授業や学校現場の内情に対応する実践を伴った研修」を実施できていない現状の改善を目指していた。

理論編研修では，参加者は，理論と実践の往還を感じられ，アクティブ･ラーニング型の研修から，演習を進んで体験することができた。しかし，より多くの受講者に合わせた研修内容にするためには，研修のねらいを絞りきれないという課題は残った。

実践編研修では，長野県はもとより，全国各地の学校に赴き，その学校にあわせた理論と実践の往還をめざした研修が実施できた。しかし，その学校に合わせた内容を講師が，思考し実施することになり，講師の負担感が増す結果となった。

Ⅲ　連携による研修についての考察

長野県総合教育センターにより，長野県の喫緊の課題を選出し，それに対応できる講師を上越教育大学教職大学院の教員の中から選定したことで，理論と実践の往還をめざす研修を組織するためには，この連携方法を今後も推進していく必要がある。

アクティブ・ラーニング型の研修により，受講者同士の学び合う関係性が高まり，人ごとの研修から自分ごとの研修へと変化していくことが見とれた。今後も，アクティブ･ラーニング型の研修は，継続する必要がある。

研修を受けても学校現場に役立てるのは，研修を受けた受講者にかかっているのは，現状の研修の課題である。本プログラムでは，実践編研修として，講師が各学校に赴き，学校の内情に合わせることで，理論編研修と実践編研修の連携が生まれ，各を体験した受講者の教員としての資質向上を実感することができたと考えている。

今後は，講師が実践編研修の内容を考えるのではなく，理論編研修を受けた受講者が，自らの学校に合わせて研修講師となることで，本プログラムの課題を解決できるのではないかと考えている。

Ⅳ　その他

［キーワード］　今日的な喫緊な課題，教員研修，教員養成カリキュラム，校内研修，実践研修
理論と実践の往還，

［人数規模］　Ｄ・51 名以上

［研修日数(回数)］　Ｄ・11 日以上

【問い合わせ先】

国立大学法人　上越教育大学

大学院学校教育研究科　教育実践高度化専攻(教職大学院)

教授　桐生　徹(kiryu@juen.ac.jp)

〒943-8512　新潟県上越市山屋敷町１番地

TEL 025-521-3436